

第 10 回 大賞(金賞)受賞作品

「机の中は空」

埼玉県 本庄第一高校二年 内田 彩香



賢治のまちから
全国高校生★童話大賞



大賞 〈金の星賞〉

『机の中は空』

埼玉県 本庄第一高等学校 二年 内 田 彩 香

背の低い本棚に囲まれた静かな放課後の図書室の中、小学五年生の創太はひとり本を眺めていました。太陽は刻一刻と傾き、部屋は急ぎ足で暗くなつてゆきます。閉じられたカーテンと窓の向こう側では、絶えず楽しげなみんなの遊び声やボールを蹴った音がかすかに聞こえてきます。創太はそんな音をぼんやり聞きながら、たったひとりで本の世界にひたっていたのでした。しばらくして、下校の時刻を告げるどこか悲しげな音楽がゆっくりと流れ始めました。創太は本を戻して、白く丸いテーブルに置いた黒いランドセルを背負って、さっさと図書室を後にしました。西日に染まったひやりとした廊下を歩いて下駄箱へ行くと、もう靴は一足しか残っていませんでしたが、中庭のプランターの周りにはまだ何個かのランドセルが置いてありました。それを見つけましたが、創太は早歩きで長い影をひとつ連れて家に向かいました。

創太はひどくおとなしく、人と話をするのがちよっぴり苦手でした。しゃべろうとするとタイミングがつかめなくて、周りはどうどん話を進めてしまふのです。それはみんなで一斉に走るマラソンのスタートのようです。もたと創太はいつも一番後ろ。大きくなるにつれてそれがひどくなつていったのでした。それを繰り返しているうちに、創太は話をするのが嫌いになつてしまいました。

「いつも自分ばかり置いていかれて。僕を誰も待っていてくれないんだ。」創太はそう考えていました。

ですが創太はそれでも良いと思っていました。他の人には伝えないけれど、自分だけの心の世界というのはなかなか素晴らしいものだったのです。美しいもの、綺麗なもの。他の人は知らない、小さいけれど自分だけの自由で楽しい世界なのです。



そんな創太が、指がうまくのばせないほど寒いある日、今までにないほど素晴らしいものを見つけたのです。

創太はその日、先生に頼まれて社会科の授業で使った細長い地図の巻物を資料室へと返しに行きました。使われていない教室をそのまま物置にしているその資料室は、薄気味悪く、みんな近寄らない場所で、創太も一度も入ったことがありませんでした。初めて入ったその部屋は、歴史の教科書で見た“千歯せんばこき”や“くわ”といった農具、陶器で出来た湯たんぽに足踏みオルガンなどと一緒に角の欠けた机や割れた植木鉢が、たくさん置かれていました。全体がうつすらとほこりをまとい、そこにある物達は動きそうでいて動く気配がない、不気味で不思議な感じでした。創太は寒さで身震いをひとつして、そこへかがんで地図をゆっくり床へ横たえました。

その時です。ふと顔を上げると、古ぼけた一つの机の中に、普段は教科書を入れているあの狭いすき間の奥に、なんと美しい空が見えたのでした！眩まがしくて白い雲が浮いていて、そして驚くほど深い青空が！

「こんな所に、小さな空があるなんて！」

創太は食いつくように机のすき間をのぞきました。

机の中の、小さな空。それは創太だけの秘密になりました。創太は悲しいことがあっても、自分しか知らないこの空を見ると、とても安心できるので、よく資料室へと行くようになりました。空はいつでも美しく晴れていて、創太の心をひきつけました。

「この空の奥はいったいどうなっているんだろう。果てのない空なのかな。」
創太は小さく微笑ほほええんで、楽しそうに考えます。

ある雪の降った日、創太の担任の先生が教室に鳥かごを持って来ました。四角形の小さなかごの中には二羽の小鳥がチュルチュルと愛くるしい声で短く鳴いています。先生の話によると、理科を教えている男の先生の家で鳥のヒナが生まれたので、創太達五年生のクラスにとくれたのだそうです。

教室のみんなは「小さい」だとか「かわいい」だとか、騒ぎ立てました。創太も鳥を見て、静かに興奮がわいてくるのを感じました。小さなかごに小さな命を宿した生き物が、うごめき、さえずっているのです。さわってみた



いなあ、と創太は思いました。するとクラスのざわめきの中、創太の後ろの席から横に身を乗り出して、

「創太、あれなんて種類？」

と、大きなはっきりした声で尋ねてきたのは、健ちゃんでした。健ちゃんは人気者で明るくて運動の大好きな男の子でした。気さくな性格で健ちゃんは誰にだって楽しそうに話しかけることが出来ました。創太に対してだって同じでした。ですが創太は反対に、いつもテンポ良く返事が出来なくて、今回も

「た、たぶん、“文鳥”じゃないかな。」

と、苦そうに笑ってひかえめに答えるだけでした。

「ぶんちょう？」

「うん。それで、おなかに模様があるから“サクラ文鳥”っていうんだ。たぶん。」

そう言うのと健ちゃんは目を丸めて、

「すっげえな創太は、物知りで！」

と、創太をまっすぐ見ながら言いました。すぐに創太は「そんなことないって」と続けようとしたが、ちょうどその時先生が手を叩いてみんなに静かにするよう言いました。

「はい、はい。じゃあ生き物係に世話の担当をしてもらいましょうね。係は創太君でしたよね？」

創太は世話をしてみたいと思っていたので、少し笑って小さく返事をしました。

すると健ちゃんが後ろの席から、

「せんせえ、鳥の世話って大変そうだから、おれも一緒に手伝ってやっていいですか。」

と言ったのです。

「いいですね。じゃあ、鳥たちはみんなでかわいがって、掃除とかエサやりを二人に任せましょう。」

先生がそう言うと、みんなは「はい」と返事をしました。



そしてその日から創太と健ちゃんの話は始まりました。二人は放課後に毎日少しだけ残って、話しながらエサをかえたり下にしく新聞紙を取りかえたりしていました。話と言っても、健ちゃんがいろんな話題を持ち出して、創太がそれに相づちをうつくらいでした。

「こいつら、なに食べていんのかな。」健ちゃんが殻ばかりになったエサを取りかえながらつぶやきました。

「ヒエとか、アワ、っていうの食べるんだって。」

創太の声は静かな教室で思いのほか大きく聞こえてドキッとなりましたが、健ちゃんは

「創太ってよく図書室で本読んでるだろ？ だから物知りなんか。」
そう言ってきれいに笑いました。

創太は照れくさかったけれど、気分の悪いものではありませんでした。自分をほめてくれる健ちゃんの言葉は嬉しかったのです。ですから創太は家に帰ってから鳥の飼い方を調べたりして、「明日このことを教えてあげよう」とか「これを言ったらきくと驚くだろうな」と考えるようになりました。そして創太は放課後、鳥かごの前で健ちゃんとよく話すようになっていったのです。健ちゃんは創太の話に耳を傾けて何だって楽しそうに聞いてくれます。

自然と会話が続けるのが嬉しくて、いつしか創太は放課後が大好きになりました。ところがたくさん話をしていくうちに、少しもどかしい感情が生まれました。机の中の空のことです。それは創太だけしか知らないとおきの秘密でしたが、だんだんその秘密を健ちゃんに話したい、という思いがじんわりとわいてきたのです。「秘密は違う人に話したらどうなるんだろう」と創太は考えましたが、わかりませんでした。きつと話したら健ちゃんはとても驚いて、そして喜んでくれるはずです。「でも、もし他の人にも言ってしまったらどうしよう。健ちゃんは友達がたくさんいるから話しちゃうかもしれないな」と創太はぐるぐる考えて何度も言い出そうとしましたが、そのたびに口ごもってやめてしまいました。

ある時健ちゃんがいつもの放課後、こんなことを言いました。

「この鳥、飛ばせてあげられないかなあ。」

だってずつかごの中ってかわいそうだ、とつぶやいた健ちゃんに、

「どこかに飛んでっちゃったら戻ってこないよ。」



と、創太は言いました。

「足をひもでくくっておいてもだめ？」

「そのほうがかわいいそうだよ！」

「だって自由がないじゃん。空を飛ばせてやりたいよ。」

「そら、」

創太はその時、頭にぱっとひらめいたことがありました。そしてひらめいたと同時に、今言わなくちゃ駄目だ、と頭の奥で思いました。

「健ちゃん、空を飛ばせてみようよ！」

気がつけば創太は真っ赤な顔をして、鳥かごを持った健ちゃんの服をひっぱってあの資料室へと向かっていました。

机の中を見た健ちゃんは、創太の思った通りに目を輝かせて机に食いついて、すごいすごい、とずっと言っていました。創太は「ああ、言ってしまったなあ」という思いもありましたが、とてもすっきりとした心地でもありました。

そして二人して机の中をのぞき込み、小さくても美しい空を眺めました。

「これね、僕の秘密の空だったんだ。みんなには内緒だよ？」

創太は自分の心の中を見せたような気がしました。

「あつたりまえだよ。」

健ちゃんは強く言いました。その日から創太だけの秘密は、創太と健ちゃんの秘密になったのです。

「鳥、飛ばせてみようか。」

そう言ったのは健ちゃんでした。創太は前からずっと、この机の中の空はどうなっているのか不思議に思っていました。もしどこまでも続く空だったなら、鳥が戻ってこなくなってしまうかもわかりません。でも健ちゃんとならば少しくらい悪いことだって出来てしまうような気がして、創太は

「うん、飛ばしてみよう！」

と返事をしていました。

かごから鳥を二人が一羽ずつつかんで出してやり、二人は両の手の中で暴れる鳥を押さえて、せまいすき間に腕まで押し込みました。創太と健ちゃんはお互いに顔を見合わせて、ゆっくりうなずきました。



「せーのっ」

健ちゃんの声を含図に二人は手の平を広げました。

すると、どうでしょう！

二人の目の前が、カッと白く明るくなったと思うと、ものすごい風が顔へ吹き付けてきました。風は顔から足の先までをなでるように流れてゆくのがわかりました。ゆっくりと目を開けると、強い風の中でもぱっちり目を開けることが出来ました。その瞬間、飛び込んだのは視界いっぱい青、青、青！そして流れてゆく雲なのです！すがすがしい晴れた空が、いちめんに広がっていたのでした。そしてなんと創太と健ちゃんは、鳥になって羽を広げて空の中を飛んでいたのです！

当たり前のことですが、創太は初めて空を飛びました。でも羽が生えた事なんて今まで一度だつてないのに、なぜか昔から羽ばたく方法を知っていたかのような感覚でした。空を飛ぶのは素晴らしく楽しいことでした。全身で自由を味わっているようです。創太は同じように飛び回る健ちゃんとなりで、羽をめいっぱい伸ばしました。

キーン、コーン、とチャイムの音が鳴ったとき、二人ははっと目を開けました。夢から覚めるときのように、読みかけの本がパタンと閉じてしまった時のような感じがします。そこは空ではなく、元のほこりっぱい資料室でした。二人は鳥を手につかんだまま小さな空の前に座っていました。

創太と健ちゃんは、ぼうつとお互いの顔を見つめ合って、そして大きな声で笑いました。

それからいつも創太と健ちゃんは放課後机の前へ来て、空を飛んで遊びました。それはとても不思議で楽しい秘密の時間でした。冬が終わって春が来て、六年生に上がってもクラスは一つしかないのです、二人と二羽の鳥は一緒でした。そうして何日か月日が経ってゆきました。

夏の暑さが和らいだころ、大変な出来事が起きてしまったのです。クラスの子が「朝学校へ来たら、鳥がいなかった」と、しゃくりあげて言いました。かこの扉は開いていて、その中にはあれだけにぎやかに音を立てていた二羽が本当にいなくなっていたのです。



創太と健ちゃんは、ただもぬけのからになったかごを見つめていました。すると話を聞きつけた理科の先生が教室へ入ってきて

「自分がクリップングをして鳥が飛ばないようにしておかなかったのが悪かったな、かわいがってくれていたのに、ごめん。」

と謝りました。健ちゃんは「クリップングって何だ。」と創太に尋ねましたが、創太には初めての言葉で答えられず黙ったままでいました。

そして次の日、鳥かごのあったところには同じくらいの大きさの水槽が置かれていました。水の中には、あわぶくを出すポンプと藻と五匹のメダ力が泳いでいます。鳥の世話係はメダ力の世話係になったのです。創太と健ちゃんは放課後、前みたいに残ってエサをあげたりしました。メダ力はくちばしでつつかれながら手を入れてエサをあげることもなく水面にただ、ふりかけみたいなエサをパラパラ落としてやるだけでとても簡単なことでした。それだから、健ちゃんはだんだんとエサをあげたらすぐ外に遊びに行ってしまうようになりました。メダ力は空を飛ぶことが出来ないから、創太に健ちゃんを呼び止めることは出来ませんでした。

そんな日々が、ゆっくりと流れてゆきました。創太はある日ひとりっきりで、放課後になってすぐ、健ちゃんとの秘密を見に資料室へと行きました。久しぶりに入った資料室の古い机の中をのぞいて、創太はそこで目をみはりました。

なんと机の中は何もなかったのです。古くてガタガタの机が変わらずにそこにポツリと立っているだけで、その中は腕を押し込んでもカツンと奥に指先が当たるきりでした。教室で教科書を入れている、ただのすき間と全く同じだったのです。

「健ちゃんと僕のほんの小さなつながりが、どっかに消えてしまった！」と、創太は顔をゆがめて何度も何度も机を見ました。そして大急ぎで教室へ走っていきました。

教室には、エサをやり終えて外へ行こうとランドセルを持ち上げたところの健ちゃんがいました。その姿を見るなり創太はかみつくような勢いで言いました。

「健ちゃん！ あの空がないんだ！」

健ちゃんは動きを止めました。



「机の中、からっぽだったんだ!」

創太は息を切らして言いました。ですが健ちゃんの反応は創太が思っていたものとは違って、

「……ほんとに?」

と、ほんの少しだけ驚いたような、静かな声でそう言いました。あせっていた創太には健ちゃんがさほど驚いた様子もないので、悪い人に見えて、少し怒ったような声で

「空がなくなったのに、悲しくないの!」

ぴしゃり、と創太はそう言いました。

「なんだよその言い方! べつに小さい空なんか、いいだろ。」

「……」

創太は言葉がなくなりました。健ちゃんの気持ちが自分と違っていることが信じられなかったのです。

「もう、鳥はいないんだ。もう、空は飛べないだろ? だからいいじゃんか!」

健ちゃんはさらに言いました。

「それに、空なんか、頭の上に大きいのあるだろ!」

健ちゃんは創太につかみかかって言いました。怒りのにじんだ健ちゃんの怒鳴り声を耳にして、創太は驚き、そして涙を浮かべて、

「あれは、あれは僕が見つけた空だった! 僕だけの空だったのに!」

と叫ぶように言いました。

教室内に、水槽のポンプの低い機械音だけが静かに流れました。やがて健ちゃんはもう知らない、と言わんばかりに背を向けて教室を出て行きました。健ちゃんは創太のことをほめて、笑ってくれていたのに、あの空も秘密も、全部なくなってしまいました。創太は床にしゃがみ込んで小さく小さく丸まって、声を殺して泣きました。

創太はまた以前と同じになりました。放課後は楽しいげな声を聞きながら図書室にいます。みんな、前と同じでした。違うのは教室にメダカがいること、創太の気持ちでした。大事な秘密を打ち明けることのできた少年とけんかをしてしまって、今はどんな物語も創太の頭には入ってこないのです。



あんなにも楽しかったのになぜ消えてしまったのでしょうか。創太はいっしょうけんめい、そのことばかりを考えました。机の中の空のことを教えなければ良かったのでしょうか？ でもたしかに、二人で毎日鳥の世話をして、あのすき間をのぞいて、そして空を飛んだことは変わらず創太と健ちゃんの秘密で、創太が机の中で見つけた小さな幸せの時だったのです。創太はもう消えてしまったあの空を、もう一度健ちゃんと一緒に飛びたいという気持ちでいっぱいでした。

「でも、健ちゃんはまだ僕の方を熱心に見てくれやしないんだ。」

創太がそう思ったその時でした。外から聞こえてくる楽しげな声に混じって聞き慣れた文鳥の鳴き声が聞こえた気がして、創太ははじかれたように顔を上げてシャツと分厚いカーテンを開けました。

創太の目に、まぶしい光が飛び込んできました。目をしっかりと開けると、そこには机の中にあつたのよりも大きい、大きい、青空がありました……。

創太は声が出なくなりました。今見える空は、かつて空を飛んだときに見たのと同じくらいに広く素晴らしいものだったのです。

「そうか……」

創太は呟つぶやきました。

“空なんか、頭の上に大きいのがあるだろ！” そう言った健ちゃんの声が頭の中にこだましました。

「どうして僕は、この空に気がつかなかったんだろう。」

いつでもそばにあったのに、と創太はすっかりまばたきを忘れて空を見上げながら言いました。そして急に自分が恥ずかしくなって、健ちゃんに謝りたくて仕方なくなりました。

創太は自分が人と関わるのが苦手なのを人のせいにしていました。自分から他の人とつながろうとしないで、気持ちを伝えないでいました。

「僕は、変わろうとしていなかった。」

もうとつくに健ちゃんは空の中にいました。小さい空を、せまいすき間から眺めているだけだった創太はやっと気がつきました。

遠くからみんなの遊ぶ声とボールを蹴る音がします。今、創太は空へ飛び立つ決意をしました。

「健ちゃんにまず、謝ろう。そうしてまた一緒に、空を飛ぶんだ！」



誰もいない図書室に、
楽しげな創太の声が届いたのは、
そう遠くないうち
でした。